

## 令和2年度 第1回 にかほ市総合教育会議 会議録

1. 期 日 令和2年11月5日 木曜日
2. 場 所 象潟庁舎 2階 大会議室
3. 開 会 午後2時55分
4. 閉 会 午後4時53分
5. 出席委員 市長 市川 雄次 教育長 齋藤 光正 教育長職務代理者 佐々木 郁子  
教育委員 吉泉 聡 教育委員 小松 雅子 教育委員 伊藤 知
6. 事務局および説明のための出席者  
副市長 本田 雅之 総務課長 佐々木 俊孝  
総務課総務管財班長 西村 智久 総合政策課長 齋藤 稔  
総合政策課企画調整班長 佐藤 学 総合政策課企画調整班 加賀 真珠美  
子育て支援課長 齋藤 和也 子育て支援課子育て支援班長 村上 裕子  
教育次長 齋藤 一樹 教育総務課長 池田 智成  
学校教育課長 菊地 新吾 教育総務課教育総務班 齊藤 沙織
7. 案 件 (1) 仁賀保高校との連携について  
(2) 子ども伴奏（伴奏）プロジェクトについて  
(3) その他

【開会 午後2時55分】

### ○事務局（佐々木 総務課長）

ご多忙のところ会議にご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。予定の時間の前ではございますけれども、皆さんお揃いでございますので、これより令和2年度第1回にかほ市総合教育会議を開会いたします。お手元の次第に沿って進めて参ります。開会にあたりまして、市川市長より挨拶を申し上げます。

### ○市川 市長

改めまして皆さんこんにちは。

午後のお忙しい時間にお集まりいただいたことに感謝を申し上げます。では、開会にあたりまして私から一言ご挨拶を申し上げます。今年の総合教育会議は例年とは趣向を変えまして、私ども市長部局の事業、教育委員会とも関連のある事業の説明をさせていただきながら、皆さんからのご意見、今後のご協力をお願いしたいと思っておりますので、忌憚のない意見交換をさせていただけたらと思います。よろしく申し上げます。

○事務局(佐々木 総務課長)

ありがとうございました。続きまして、教育長からご挨拶をお願いします。

○齋藤 教育長

市長と同じですので、会議を進めてください。よろしくお願いします。

○事務局(佐々木 総務課長)

はい。わかりました。(配布資料について説明)(欠席者の報告)それでは、案件の協議に入ります。案件の進行につきましては会議設置要綱の規定によりまして、市長が会議の議長となりますので、進行を行います。市長よろしくお願いします。

○市川 市長

それでは、始めに「(1)の仁賀保高校との連携について」を議題といたします。事務局からお願いします。

○事務局(佐藤 総合政策課班長)

(事業について説明)

○市川 市長

事務局から説明させていただきましたが、私から、あらかじめお話をさせていただきたいと思いません。県の第7次計画、後期5か年で、西目高校、仁賀保高校、由利工業高校の3校を統合し、2校にまとめるという予定でありました。にかほ市にとっては、好ましからざることであるということは、説明にあったとおりですが、これを何とか食い止めなければならないという思いで県の教育長、教育委員長に要望して参りました。ただ要望を行うだけではだめで、要望するからには市としてどのような責任を負うのかということをしり上げ、要望に入っていました。本荘由利地域にも高校が複数あるなかで、仁賀保高校にのみ肩入れをし過ぎているのではないかと先生もいらっしゃるのですが、にかほ市にとっては、他の高校と位置づけが全く別だと判断して、連携事業を行わせていただいているところです。しからば、仁賀保高校の存続が決まったのかと言うとそうではありません。存続については、資料の12ページにも書いてあるように、”生徒数の推移を注視しながら”という前提条件があります。生徒の数が確保されない中では、仁賀保高校の存続はあり得ないということが、県の教育委員会から示されているのです。したがって、私どもが取り組むべきことは、仁賀保高校と一体となって、仁賀保高校の存続に向けて何をしなければならないかと考えたとき、一義的に、生徒の確保だということになります。生徒を確保するためには、何をしなければならないかということ、やはり、高校の魅力化を図っていかなければならない。2つ目には、地元の中学生、象潟・金浦・仁賀保3地域の中学生に仁賀保高校を選択肢に入れてもらわなければならない。3つ目としては、市内の中学生のみならず、県内他市町村の子供たちにも選択し得る高校として、整備していかなければならない。この3つが生徒を確保するうえでやるべきことであろうと考えております。

高校の魅力化については、今、説明した連携事業をとおして何を目標にしているのかということ、

高校に対する信頼度を上げることです。そのためには、実績を上げなければなりません。進学実績と就職実績です。就職実績については、コロナ禍で非常に厳しい状況にありますし、経済状況によるところもございますが、今まで100%の内定あるいは、就職実績があります。現時点では、多くの企業、商工会にお願いしているところです。進学実績については、高校として厳しい位置づけであるというのも事実です。偏差値というものではなくて、経験値によって実績を作り上げていくことに取り組んでおります。その結果として、大学の指定校推薦の枠を2校から頂いています。1校は、中央大学。もう1校新たに、青森県弘前市にあります東北女子大学、来年度、柴田学園大学に名称が変わりますが、指定校枠を頂いております。中央大学から推薦枠を頂いた経緯は、先ほど説明がありました日水コンと「with 下水道プロジェクト」のプレゼンをパシフィコ横浜で行いました。その結果、仁賀保高校に対する評価が上がって、推薦枠をぜひ仁賀保高校にもとお話を頂いたところでもあります。特別、進学校に行かなくても、中央大学に進学できるというのは、大きなアドバンテージになるのかなと思っています。今の大学1年生、前年の高校3年生の進学実績を見ていただければ分かるように、皆さん一般入試はしていません。推薦入試又は、AO入試で進学していますが、国公立、私立大学にそれなりの数生徒が進学できています。今年も、秋田大学を目指している生徒もいますし、他の大学を志望している生徒もいると伺っておりますので、進路実績については、これからも着実に積み上げていきたいと思っております。もちろん高校が主体ですが、行政としてできることは協力していきたいと思っております。地元中学生へのアプローチが一番大事だと思っております。ここを教育委員会の皆さんに、特にお願いしたいと思っております。ご助力、ご助言を頂きたい部分であります。高校からは、校長先生又は、進路指導の先生方が3中学校に訪問しておりますけれども、なかなかそれだけでは、理解していただけない。特に、保護者の皆さんの仁賀保高校に対する理解度、信頼度を上げてもらうのは、学校だけでは無理です。行政、市が教育委員会と一緒にやっていかなければ、意識の向上、意識の転換はなされないと考えておりますので、皆さんにお話させていただきます。

3つ目の県外他市へのPRであります。やはり、市としてやっていかなければなりません。仁賀保高校は県境にありますので、由利本荘市、遠くて秋田市の新屋くらいまでがギリギリのところ。最近では、由利本荘市の子供たちも仁賀保高校に進学しています。ですが、由利本荘市の矢島、鳥海、東由利、大内にあつては、交通手段の面から通学しづらいので、県の教育委員会と話をし、でき得ることを考えながら、県内他市からの誘導も図っていきたいと思っております。

いずれ、仁賀保高校の存続は、にかほ市にとって生命線であると捉えていますので、引き続き存続に向けた取り組みにまい進してまいります。ご理解をよろしくお願ひしたいと思っております。

私からは以上です。皆さんからご質問や確認事項、あるいは、ご意見をお願いしたいと思っております。

## ○伊藤 委員

仁賀保高校の存続は非常に大切なことだと思いますが、例えば、特色のある学校ということで、情報メディア科の話が出ていますが、情報メディア科を卒業した学生がどのくらい、その関係の仕事に就いているのか分かりませんが、にかほ市内には、情報メディアの仕事ができるような企業はありません。私が知る限り、近くても秋田市になる訳ですが、そうした受け皿を作っていかなければいけないということです。情報メディア科を活かすうえでの一つの条件だと私は思います。

また、先ほど市長がおっしゃったように、中学生の子供たち、あるいは、父兄を取り込まなけれ

ば、仁賀保高校に入る子共が少ない。一番のネックはそこだと思います。親御さんがあまり勧めないということがリンクしていくと、結局、就職先がない、情報メディア科に入っても地元に残らないという同じサイクルで回っているように感じます。今、中央大学に入れる推薦枠があったとしても、他の高校みたいに一気に進学校になるというのは不可能であって、長いスパンで考えていかなければならないので、まずは、情報メディア科を卒業した方を受け入れる職場を市内に作れば、というのが個人的に考えたことでした。

## ○市川 市長

他にございませんか。

## ○吉泉 委員

市長がおっしゃったとおり、進学や就職の実績を上げていくことが保護者の信頼、理解を得られる非常に大きな要素だと思います。令和元年度の進路実績の資料を見ますと、4年制の大学に4人、私立大学に12人ということで、入学時の偏差値からすると、かなり高い数値だと思います。同じ成績で他の進学校に行くよりは、少数精鋭で親身に、個別に対応してくれて進学実績も上がりますし、指定校推薦枠を中央大学というメジャーな大学からももらっているということです。一人一人にきちんと寄り添った進路指導ができるというのが、ひとつの売りになるのではないかと思います。それから、就職の実績も商工会、企業に働きかけをしているということでしたが、仁賀保高校に入れば、地元の就職に有利であるという、これは大変難しいと思いますが、毎年1人は仁賀保高校から市役所に採用するとか、そうしたことも含めて、仁賀保高校の大学進学、地元就職は、他の高校の追随を許さないという特色を強く打ち出していくことも大切だと感じました。私からは以上です。

## ○市川 市長

ありがとうございます。他にございませんか。

## ○小松 委員

私も、皆さんの意見と同じで、出口戦略が大事だと思います。推薦枠を一生懸命とっていただいても、推薦で入った子がどれくらい大学で学べるか、勉強についていけるかが厳しい問題だと思います。今の話からそれるかも知れませんが、推薦で入った子が途中でリタイアするというのは、ない話ではないので、大学できちんと結果を出せるかが一番の問題だと思います。仁賀保高校生と接して思うのは、行事にも積極的に参加して、とても真面目な子たちがいる反面、そうでない子たちもいます。昔は、やんちゃな子が目立っていたのですが、今は、そうではないですね。人数が減ってきた分、先生方の目が行き届いて、そういう子が少なくなったとは思いますが、一定数はいるので、上ばかり見ないで、ギリギリの子たちを無事に卒業、就職させるということも必要だと思います。昔の仁賀保高校はもっと偏差値が高くて、TDKに高卒で入った方もいらっしやれば、市役所に就職した方も結構いましたよね。それが、今はなかなか入れないので、今後、市役所に入って仕事ができるような人材を育ててもらいたいと思います。

特色のある学科ということで、情報メディア科がありますが、CGを作るときには、美術の基本

的な知識、学習は不可欠だと思いますし、プログラミングに至っては、数学の確実な学力が必要だと思います。いろいろな行事に参加するのも大事ですが、日々の勉強に力を入れて、その勉強してきたことが、将来につながるということを改めて考え直してみたらいいのではないかと思います。以上です。

#### ○市川 市長

他にございませんか。

#### ○佐々木 委員

大学進学や、その先のことを考えると本荘高校になると思います。親もそうなら、子供もそうなると思います。それを仁賀保高校にもってくることを考えれば、5年後というのは難しいですが、例えば、特別進学クラスを作り上げていくとか、入学すれば必ず国公立大学、私立の英数学科に入れるようなクラスを確立できるのであれば、将来に道があると思います。親にも子供にも具体的なことを示さなければ、何をメインに考えているのかが伝わらなければ、親子の意識も変わらないと思います。仁賀保高校に入らなければ、特定の大学にスムーズに入れられないという道があれば、県内他市町村からも入学してくる気がします。このままでいいという先生方、学校であれば、子供たちは選びません。この高校を残したいという先生方、行政の意思があればおそらく可能性はあると思います。ですので、協力できることがあれば、お声がけしていただきたいと思います。以上です。

#### ○市川 市長

教育長から、何かございませんか。

#### ○齋藤 教育長

市長からもお話がありましたとおり、仁賀保高校を受験する生徒を増やすには、教育委員会として何ができるか、どんな関わりを持てばよいのかということですが、私なりに、5点、頭の中に入れて参りました。

まず、1点目ですが、仁賀保高校がコミュニティー・スクールに指定されなければならないと思います。県立高校ですので、市町村の教育委員会が指定することはできません。県の生涯学習課に行けば、すぐに指定してもらえます。私は以前から、仁賀保高校にコミュニティー・スクールに指定してもらってくださいとお願いしてきました。小学校・中学校・高校のコミュニティー・スクールの確立することで、仁賀保高校の存在価値、かけがえのない学校であるということを地元の人に浸透させるためです。警察署がなくなった場合は、あちこちの団体がなくなると署名運動をしました。ところが、仁賀保高校については、誰一人、中心になって署名運動等をしようとしません。行政が今までやってきたことに、市民、保護者、生徒を含めた土台作りが大事なのです。

今、にかほ市には、教育振興会があります。市長が委員長になっていますが、その会議の中に、もう少し地元の方、企業、自治会、伝承芸能の関係者なども入ってもらい、今までの事業の成果を見てもらったうえで、仁賀保高校はかけがえのない存在だということを再認識し、地元の意識を高めてほしいと思います。矢島高校そして、六郷高校も先日、コミュニティー・スクールに指定されました。市民全体で高校を残そうとしています。矢島高校では、「矢島高校を考える会」で本荘高校

出身の方が中心となって定期的に会議をもちながら、市民に活動を広げようとしています。私は、そうした人が出てこなければいけないと思います。出てこないということは、ある意味では、その存在価値が広く発信されていないのではないかと感じます。ですので、今の校長先生の段階で、コミュニティー・スクールに指定して、小・中・高の連携の中で仁賀保高校の存続について考えていくという捉え方をしてほしいと思いました。

2つ目は、中学校のリーダー講習会があります。松島町との交流事業ですが、この講習会に仁賀保高校も参加して、小・中・高のサミットを年3回開催したいと私は思います。つまり、小学校の児童会代表、中学校の生徒会代表、仁賀保高校の生徒会の関係者が集まって、スマートフォンの利用、トラブルの解決方法とか、にかほ市の少子高齢化について、生徒の立場で何ができるかとか、仁賀保高校が中心となって、自分たちの課題、市の課題について考える機会にしていく。最終的には、模擬議会までに高めていきたいと思います。そうすれば、市民にも仁賀保高校の取り組みが浸透するように思います。

3つ目は、職場体験です。実際に働く喜びや苦勞を体験することが、私は大事だと思います。それ以上に、その体験を基に、自分が仕事をするときはこうした方がよいとか、こうしたら企業がもっと良くなるとか、豊かなアイデアを出し合うことが大事だと思います。そして、仮称ですが、「地域活性化協議会」を開けばいいと思います。その会議には企業、商工会、行政も集める。その発表会の場で、出されたアイデアを会社に取り入れてみようということになれば、企業にも、商店にも浸透していくし、このようなことが重なれば、ふるさとの未来をどのように描いていけばよいか自然に身に付いていくと思います。職場体験だけではなく、その体験から学んだこと、考えたことを発表する場を中・高で作ってはどうか。商工会長が会長を務めているキャリア教育実行委員会のメンバーとも話をする必要がありますので、これから相談していくべきだと思います。仁賀保高校生は、地元就職するのだという命題があるような気がいたします。そうすれば、地元の企業に見合った人材にならなければいけない。“情報メディア科の受け皿”と伊藤委員がおっしゃいました。そのことも含めて、この協議会は大事だと思います。

4つ目ですが、小・中・高の学力向上プロジェクトを作りたいと思います。先ほど、偏差値よりも経験値だというお話がありましたが、経験値というのは、いろいろな知識がなければ、豊かにならないと思いませんか。私は、そう思います。ただ体験させるだけでは、指示待ち人間になってしまう。そうではなく、偏差値にもこだわらなければならない。偏差値にこだわって小・中・高の学力をいかに向上させていくか、そのために私たち教育委員会では、管内の学校を授業研究会に指定しています。指定の中に仁賀保高校を入れて、毎年、研究授業をやってもらいたいと思います。小学校、中学校は輪番制でやっていくというのが私の考えです。高校の先生方も小・中学校に来て勉強する。そして、高校の先生方も授業力を高めていかなければならない。今年度、仁賀保高校に319点で入った子がいます。その子を仁賀保高校はどうするのか。私は不思議に思います。その子を中心にして、5人又は、10人グループを作ります。これを「フレンドシップ制度」といいますが、仲間を作って、3年間その輪を絶対崩さないようにして、難関大学を目指すものです。私は、特別進学コースと地域づくり・まちづくりを担うリーダー制を採る、いわゆる地域総合コースに分けることが必要ではないかと思いました。今の生徒数は193人です。各学年70人足らずで、少人数です。校長先生もおっしゃっていますが、少人数指導で指導すれば学力を上げるのは簡単だというよりも、一人一人に関わっていけば偏差値は上がると私は思います。市長が呼んできた日野田先生は、大阪

府箕面市の学校を偏差値 40 から 70 にまで上げてくれました。あの先生の講演を聞いて、とても感動しました。先生方の意気込みで偏差値は上がるということを私たちに教えてくれました。そうした先生方から学ばなければならない感じがいたします。その意味でも、先生方を応援していきたいと思います。経験値だけでなく、偏差値を上げることに力を入れるよう、校長先生にお願いしていきたいと思います。

5点目は、プログラミング教育です。これまで、小学生を対象に勉強会を開いていただいて本当に感謝しています。これをもっと充実させて、仁賀保高校を中心に「秋田県産業教育フェア」を、由利工業高校の機械科、西目高校の総合学科と一緒に仁賀保高校に誘致したい。そのくらい魅力を発信してほしいと思います。一昨年は、全国の産業教育フェアを秋田市で開催しました。全県は簡単に誘致できると思います。仁賀保高校の取り組みを市民の方に見てもらいたいです。

また、これは教育次長に関わってもらっていますが、伝承芸能の体験会を“伝承芸能クラブ”に格上げし、由利高校の民謡部と一緒に、全県の大会である「秋田県高校文化祭」を誘致することができたらと思います。

今、仁賀保高校の校長先生が各中学校を訪問して、地元の高校に進学するようにお願いしています。60人から80人くらい仁賀保高校を受験してもらおうようにお願いしていました。それに応えられるように頑張っていますが、実際には受験者が増えない状況です。市長のおっしゃったとおり、高校だけでなく、行政も協力していきたいと思います。

## ○市川 市長

いろいろとお話いただきましてありがとうございます。一つ一つにお答えするのは難しいので、できる範囲ではありますが、お話ししたいと思います。

仁賀保高校と行政との取り組みを始めて2年目です。そのなかで実績が上がったのか懐疑的な考え方もありますが、私たちも走り出したばかりです。仁賀保高校と行政だけがやっても向上しないと思っています。お話ししていただいたような、これまでの仁賀保高校に対するイメージを払拭していただくことも必要かと思います。どのようなことをやっているのか、学問を蔑ろにしているのか、そうでないのかということを含めて、教育委員の皆さんに少しアプローチしていただきたいと思いますので、ご理解をお願いいたします。今まで、なかなかご案内できなかった部分もごさいますので、実際に見ていただき、こうすればよいのではないかという意見を出していただければ、これから先、次のステップに進めるのではとっております。私どもだけではなく、教育委員の皆さんにもご理解をいただくということが、ひいては、にかほ市全体のためという目標が決まっておりますので、その方向に進むためのプロセスだと思ってご理解をお願いしたいと思います。そのなかでも受け皿作りについては、やっているつもりであります。まだ、実体が出てきておりませんが、別の枠組みの中で進めています。伊藤委員がおっしゃったとおり、私が仁賀保高校の評議委員をしていた時も、情報メディア科の生徒の受け皿がないということで、卒業後は東京に行かざるを得ないという状況を当時から、何とかしなければならぬと思っておりましたが、時代が追い付いてこなかった。IT関係の企業が地方にくるとい時代ではなかったのですが、今はまさにコロナ禍でありまして、風向きが変わってきているということもあります。これを利用しながら、秋田県とも連携をしながら進めていきたいと考えています。少し推移を見守っていただければと思います。しかしながら、ゆっくりしていると子供たちの就職する場所がないままです。アクセルを踏みな

がら進めていきたいと思えます。よろしくお願ひいたします。

担当から、何かありませんか。次の案件に進んでもよろしいですか。

### ○菊地 学校教育課長

報告があります。本日、秋田市の保護者から、仁賀保高校について教えてくださいという電話が学校教育課にありました。受験等に関することは、県の教育委員会に問合せたほうがよかったですですが、指導主事がお話を伺ったところ、昨日、中学校で三者面談をし、生徒が自分から仁賀保高校に進学したいと言ったそうです。どういう学校かという問合せでした。情報メディア科に進学したいということでした。嬉しく思いましたし、受験してくれたらと思ひましたので、ここで報告させていただきます。

### ○市川 市長

私たちが仁賀保高校を露出させていかなければならないと思ひています。ですので、殊更、大きさにPRしてはいますが、実態が付いていかなければ、皆さんの心配されているとおりであります。市役所で必ず一人雇えばいいのではないかとご意見もありませんが、やはり、採用の公平性が保たれなければなりません。ここ数年は、仁賀保高校で受ける子がいなかったのですが、まずは、試験を受けさせてくれということは伝えています。市役所を受ける絶対数が少ない状況です。これが今、私どもの悩みの種であります。受験者数を増やしたいのですが、闇雲に縁もゆかりもない人が来てしまうこともあります。このままではいけないと思ひています。魅力ある職場を発信していきたいと思ひますのでよろしくお願ひします。

それでは、次の案件に入りたいと思ひます。「(2) 子ども伴奏プロジェクト」について事務局から説明をお願いします。

### ○事務局（齋藤 子育て支援課長）

（事業について説明）

### ○市川 市長

齋藤課長から説明していただきましたが、この事業は、市長部局の福祉分野の事業になります。しかしながら、課長が後段で述べました子供たちに対するアプローチが就学後でないと、なかなかできないという問題があります。そのことがよいのか、私たちが疑問に思ひますし、教育的アプローチと言ったら大きかかもしれません、保育園で行っていただひていることに何かお手伝いできないかということも含めて、担当課長からお話をさせていただきました。

皆さんからご意見を伺えたらと思ひますので、よろしくお願ひします。吉泉委員から何かありませんか。

### ○吉泉 委員

市長がおっしゃったとおり、生まれてから、にかほ市で成人するまでを過ごす場合には、市の行政、教育行政の区別なく、連携をとって支えていくことが必要です。今も取り組まれています、福祉行政と教育行政がより連携を深めていくということが大切だと思ひます。

例えば、障がいをお持ちのお子さんが、学校に入る前は、福祉行政で関わっていると思います。学校に入ったら教育委員会、学校を卒業すれば福祉行政と進むのであれば、業務にあたる担当者が、“個人情報だからその方の情報を出せない”ということではなくて、厳密に管理したうえで情報の提供が行えれば、学校を卒業して、地域で暮らすうえで、より充実した支援ができるのではないかと思います。

資料の子育てガイドブックには載っていませんが、事前に配布していただきました、まち・ひと・しごと総合戦略の中に、結婚支援があります。いろいろな出会いの場の提供も大切だと思いますが、イベントに参加するときに、どうすれば、より良い人間関係を築けるかとか、コミュニケーションの講座などがあればいいのかなと思いました。いざ異性と話そうと思ってもできない人もいますので、どういうコミュニケーションをとれば好感が持てるかとか、信頼を得られるかとか、直接、子育て支援には関係がないのですが、結婚支援というところでは必要かなと思いました。

これは、市民の皆さんの価値に関わることでありますので、行政が立ち入るとするのは難しいと思うのですが、例えば、ひとり親への支援があります。いろいろな事情があつて、ひとり親になる訳ですけども、理想は、離婚をせずに夫婦円満で地域生活を営むことができればいいと思いますので、夫婦のコミュニケーションについても、円滑な関係を築くための勉強の機会もあつたらいいなと思います。これは、ひとり親になった人が肩身の狭い思いをするということで、離婚率がとても少ない市を目指すことを地域ぐるみで働きかけていけたらと思って、発言するかどうか迷ったのですが、お話をさせていただきました。

#### ○市川 市長

ありがとうございました。佐々木委員からご意見ございませんか。

#### ○佐々木 委員

仁賀保の子育て支援センターには、由利本荘市からも来ています。にかほ市内には、地域ごとに子育て支援センターがありますが、他市の親御さんからも、とてもいいなという声が聞こえてきます。今、金浦に建設中の施設がありますけれども、市として、1つ、屋内に子供たちが集まって過ごせるような、親同士が交流できるような場所があつたら、ありがたいなと思います。要望としてお話をさせていただきます。

2019年の北海道東北ブロック住みよいまちランキング1位は、すごいことだと思います。やはり、行政の皆さんのご尽力でありますし、子供たちが安全に生活できるということ、金銭的な面でも手厚い補助があるということは親御さんにとって、ありがたいことです。私たちもPRしたいと思いますし、皆さんからも頑張ってくださいと思います。

#### ○市川 市長

ありがとうございました。小松委員から、ご意見等ございませんか。

#### ○小松 委員

私が子育てしていた20年くらい前のことですが、子供が0歳児の頃から働かなくてはならず、保育園があることも知らず、育児にとっても困りました。子供を家政婦さんをお願いし、実家から母を

呼び寄せ、最後にはシルバー人材までお願いしていました。その頃、この子育てガイドブックがあればよかったなとつくづく思いました。この冊子を市内だけでなく、他の市町村にも置いてもらって、“にかほ市はこんなことをやっている”ということを知ってもらえたら、にかほ市で子育てしようという人が来てくれるかもしれないので、見せてあげてください。学生への補助もとてもうらやましくて、先日、個人的にネウボラに伺ったのですが、大変お世話になりました。にかほ市のことではなかったんですが、とても親切に対応していただいて、速攻解決して、本当に助かりました。感謝しております。相談する場所、入り口が分かりやすいのは、とてもいいことだと思いました。電話番号でも、場所でもいいので、“ここに相談すれば何とかなる”というところをもっとアピールしていただけたらと思います。

それから、発達障がいのお子さんについては、精神科にかからなければならない事例も今後増えてくると思います。精神科を受診するのはとても大変だと聞いています。予約してから1か月、2か月後だったりして、緊急対応もなかなかできないそうです。小さいうちはいいのですが、大きくなってくると刃傷沙汰になってしまう子もいます。残念ですが、にかほ市には精神科のお医者様が少ないですね。お医者様の都合もあります。例えば、弁護士さんの相談会のような会を半年に1回でもいいので市が主催して、精神科医と直接つながれるような機会といいですか、精神科に対するハードルを下げるような取り組みをしていただければ、ありがたいと思います。以上です。

#### ○市川 市長

ありがとうございました。他にございますか。

#### ○伊藤 委員

今、説明がありました事業については、進行形で、非常にいいことであって、他市町村からも、にかほ市はうらやましいなという声を聞いています。これをもっと定着させて継続していければいいのですが、心配ごとがあります。今、子供が少なくなっているから、この予算を確保できると思いますが、魅力のあるにかほ市ということで、多くの方が移住してきて、子供が増えたとき、財政的にどうなのか。それは、市長が考えることである訳ですが、もう、この規模が限界かなと思いますので、この事業が定着していったら、どんどん他市町村にPRしていただきたいと思います。

この事業とは関係がないのですが、教育委員会からの意見を聞きたいというようなお話がありましたが、冒頭、市長がおっしゃったように、総合教育会議というのは、いつもはこのような形でなく、“こういう事業を考えています”という提案があって、それについて話し合うという場です。そのようなことがなければ、意見交換ができないということ自体が不思議でならない。総合教育会議の場でなくてもいいので、いろいろな場面で、関連する部門が意見交換、協議できる機会を設けてほしいと思います。私からは以上です。

#### ○市川 市長

はい。内部検討したいと思います。決して否定している訳ではなくて、どういう形がいいのか、ただ闇雲に意見交換をするということではなく、教育委員会からもテーマをいただきますし、こちらからもテーマをもって話し合いを進めていきたいと思います。

私が1つ目にお話しました、仁賀保高校との取り組みも始めて2年ですし、情報が行き渡ってな

い。どういうことをやっているのか、それで、果たして効果があるのか疑問に思われると思うんですね。そうすると、実際、現場に行って校長の話を聞いてもらうとか、教育委員の皆さんと協議してもらうと、より実態が分かってくると思います。その中で思ったことを私どもにフィードバックしていただけたらと思いますのでよろしくをお願いします。

教育長から何かありませんか。

#### ○齋藤 教育長

吉泉委員から結婚支援に関すること、夫婦間の関係についてもお話がありましたが、今、若い人たちが命の大切さを知る機会がとても少なくなっていると感じます。中学校の家庭科の時間に、妊婦さん又は、赤ちゃん若しくは、幼稚園、保育園の子供と接する題材があります。実際に触れ合っ

#### ○市川 市長

はい。検討します。

今日お話いただいたことについては、私どもできちんと整理させていただきたいと思います。その整理した結果もお知らせするんですよ。次長。

#### ○齋藤 教育次長

はい。

#### ○市川 市長

他に何かございませんか。この2つのテーマ以外で何かございませんか。

#### ○吉泉 委員

今月の広報が私の職場にも届いていました。私は、由利本荘市に勤務しているのですが、子育て支援も、にかほ市はいいなという声を聞いております。インフルエンザの助成を含めて、にかほ市民でよかったと思います。

#### ○佐々木 委員

広報の表紙もとてもよかったです。

#### ○市川 市長

ありがとうございます。他に委員の皆さんからございませんか。

(なしの声)

○市川 市長

以上で、私の役目は終わらせていただきます。ありがとうございました。それでは、事務局に戻します。

○事務局(佐々木 総務課長)

ありがとうございました。3時前に始まりまして、休憩なしでほぼ2時間、大変お疲れ様でした。貴重なご意見たくさん頂戴しました。感謝申し上げます。今後の予定ですが、先ほどご指摘ありましたとおり、この会議を設置して以降、2回目の会議が開かれたことはなかったということで、第1回とうたう必要があるのかということですが、今年度で開催する予定はございません。協議事項が生じた場合には、またご案内をさせていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。また、総合教育会議自体についてもご意見を頂戴しましたので、この会議以外の場も、総合的に考えて参りたいと思っております。

これをもちまして、第1回総合教育会議を閉会いたします。大変お疲れ様でした。

【閉会 午後4時53分】